

天下の暴論

花田紀凱



「団塊世代の応援歌」というキヤッチフレーズの「盛春歌」という歌が静かにヒットしている。気がついたらこんな年になつていた。力道山の空手チョップをまねして、長嶋野球にあこがれた――

その後、歌詞に裕次郎やゴルフの尾崎、若大将・加山雄三なども出てきて、確かに団塊世代には懐かしい歌に違いない。

この歌を作曲し、自ら歌っているのが南部なおとさん(作詞は克舟さん)。

団塊世代癒やす「歌う営業マン」

自らが団塊世代の南部さんは長嶋茂雄をイメージしてこの曲をつくった。で、南部さん、思いを込めた手紙とともにCDを長嶋さんに送った。

すると、後日、「頑張れ盛春」と書いたミスター直筆の色紙が事務所に送られてきたという。

南部さん、実は本業は日本生命のセールスマンなのだ。それも並のセールスマンではない。生命保険と金融サービスのプロ中のプロでなければ入れない国際組織MDRT(Millionaire's International)

「実は日本生命のセールスマン」と書いたが、もう一度。実は南部さん、もともとは横浜の今はなきバンドホテルにあつたナイトクラブ専属のバンドマンだった。

1976年には、日本コロムビアから「南部直人とラブロマンス」としてメジャーデビューし、順風満帆の日々だった。ところが80年代、カラオケが普及するにつれバンドの仕事が激減する。

そんな時、演奏していたクラブの常連だった日本生命の優秀なセールスレディーにすすめられ、生活のためにセールスの世界に飛び込んだのだ。35歳の時だった。

「毎月1億円の契約を取れば給料は100万円」

その言葉に奮起し、ガムシラに働いて月1億円の契約を取り続けた。

週2回、近くの銀行の食堂に行つて、行員にお茶をいれたり、銀行の納涼祭でギター演奏したりしつつ、信頼を得たというから並の努力ではない。

旧知の二階堂伯彦さん(スパーク・STAFF)が南部さんをマネジメントすることになり、紹介してもらい記事にしたこともある。

その南部さんが日曜の夜、横浜のホテル・メルパルクで「ロックロック!66 バースデーコンサート」を開くというので、行ってきた。

友人の小森敦己くんも同行。小森くんは74歳の今も男声合唱のグループ「ハイ&ロウ」で歌つている音楽好きだ。

「盛春の条件」から始まって「盛春の歌」まで14曲、演歌からロックまで、楽しい歌と演奏だった。

ぼくが懐かしかったのは水原弘の「黄昏のビギン」。改めて名曲だと思つた。

途中、客席から、身ぶり、「なおちゃん、(ベンチャーズの)テケテケテケ」やんないの」「さっきやっただけだ」「これはご愛きよう。」

音楽通、小森くんの感想。「とかくプロは難しい歌を歌いたがる。客にレベルの高い歌を聞かせようとする。だけど、南部さんの歌った歌は親しみのある曲ばかり。客と楽しい時間を共有しようという南部さんの気持ち伝わってきたね」

オールドボーイ、オールドガールたちが曲に合わせてツイストを踊ったり。楽しい一夜だった。

(月刊『Handa』編集長)



「盛春歌」を歌う南部さん

オレシジジ世代応援 タリ7ジ